9月11日のウクライナ情報

安斎育郎

❶【解説】なぜ米国とウクライナのネオナチは連結するのか　その糸を引く CIA（2023 年９月８日）

米中央情報局（CIA）は国家政策の道具として国内外でファシスト集団を利用している。米国人ジャーナリストで独立系メディアの評論員を務めるライアン・クリスティアン氏はスプートニクに対してこう語っている。

9 月 2 日、2 つのネオナチ組織「ブラッド・トライブ」（Blood Tribe、「血族」の意）と「ゴイム・ディフェンス・リーグ」（Goyim Defense League、「ゴイム防衛連盟」）の数十名のメンバーが米フロリダ州でディズニーワールドを目指して行進を行った。元米海兵で「ブラッド・トライブ」のクリストファー「ザ・ハンマー」ポールハウス代表は、ウクライナのナチ集団「アゾフ大隊」（ロシア連邦ではテロ組織として認定）を称えるシュプレヒコールを上げ、その隣を米国人ネオナチのケント「ボーンフェイス」（「骨の顔」の意）マクレーランが練り歩いた。

保守派の調査記者のローラ・ルーマー氏は自身のツイッター上で、CIA がマクレーランをウクライナに送り込み、ウクライナのネオ・ファシスト組織「右派セクター」（ロシア連邦ではテロ組織として認定）と、「アゾフ」関連の国際的な極右組織「ミザントロピック・ディヴィジョン」（Misanthropic Division、「人間嫌い師団」の意）にボランティアとして志願させた事実を暴いた。

ルーマー氏はまた、マクレーラン「ボーンフェイス」が戦争犯罪に関与していた恐れが高いとし、証拠として、アゾフ大隊の制服を着たマクレーランが「民間人の遺体の脇に立つ」写真を添付した。ルーマー氏はこの写真を法医学鑑定にかけ、信憑性を確認している。ルーマー氏は、後日、マクレーラン「ボーンフェイス」自身が脅迫電話をかけてきた際に、自分の方から他に加担した新たな戦争犯罪を告白したと話している。

ラジオ番組も担当するライアン・クリスティアン記者は、今、起きていることの全体像は単なる、米国とウクライナのネオナチ組織とのつながりという話をはるかに超えるという。クリスティアン記者は、確かに過激派はどこの国にも存在するものの、中にはどう考えても米政府の「エージェント 」のような者が存在すると強調している。

「例えば、『パトリオット・フロント』（「愛国者戦線」）のような組織の活動を入念に調査すれば、すべての『糸 』が CIA と彼らのアジェンダにつながっていることに気づくだろう。…これは事実、重要なことだ。なぜならウクライナでは多くの人々が『ロシアの言う（ウクライナの）脱ナチス化は嘘 』だと話しているからだ。ところがその一方で、企業メディアは 2022 年 2 月まではウクライナにはナチズムの問題があることを語り続けていたのに、その後は突然沈黙してしまっている」

以来、西側のマスコミは躍起になって「アゾフ」の悪評を掃おうとしている。特別作戦の開始時にマリウポリで、アゾフの数千人の戦闘員が投降した際に、その多くの者の身体がハーケンクロイツのやその他のナチスのシンボルのタトゥーで覆われていたことが分かった後でもアゾフを悪く言おうとはしない。

それどころか、アゾフはかつて大隊だったが、今日ではすでに独自の国民軍団（ナショナル・コー）を持ち、彼らが警察を動かしている事実をクリスティアン記者は指摘している。

クリスティアン記者は、CIA には「エアロダイナミック」（Aerodynamic）というプロジェクトがあることを指摘している。同プロジェクトは、ウクライナ民族主義の思想家であり、ナチス独の共犯者でユ

ダヤ人と自分の同胞を大量殺害したステパン・バンデラの信奉者の残党を支援するための米国の諜報活動である。

「私の知る限り、この CIA のプログラムは 1948 年に始まった。CIA は、ウクライナ民族主義者組織と、その活動員のニコライ・レベジ（ミコラ・レベジ）というナチスの戦犯を利用して、ファシズムを育成した。レベジはニューヨークに連れられて、『プロローグ』（編集：出版および研究センター）という会社を経営していた。そしてこの会社は米国のオーディエンス向けの放送を行っていた」

クリスティアン記者は、CIA がウクライナの民族主義者を育成し、資金を提供していたことが完全に証明されれば（この事実については FBI 内でさえ話題になっていた）、今日の事態の全体像の多くが明らかになると語っている。

❷ウクライナの支配者はナチス　これが見えない人は盲目＝米軍事評論家（2023 年 2 月 18 日）

米海兵隊元将校で現在、軍事評論家のスコット・リッター氏は YouTube チャンネル「Naturalist Capitalist」からのインタビューに、かつてナチズムを相手に戦った米国が、今や「キエフのナチ政権」に致死兵器の入手を助けていると懸念を表明した。

リッター氏は、ウクライナ軍の戦闘員に会って、まず目につくのがナチスのシンボルがいたるところで用いられていることだと指摘する。またウクライナ軍の兵士らが賛美して歌うステパン・バンデラをリッター氏は「ヒトラーに心酔したならず者」だったと言い切る。現在、英国で戦車チャレンジャー２ の使用訓練を受けているウクライナ兵を見れば、意外なことがたくさん見えてくるかもしれない、とリッター氏は言う。 例えば、CNN がウクライナ軍人らを撮影した映像には、彼らが挨拶する際にまず手を振り、それから典型的なナチ式の敬礼をする姿がとらえられた。ただしこの映像はすぐにネットから削除された。

ウクライナ軍がナチス的性質であることがはっきり証明された、もうひとつの場所はドイツで、ウクライナ人が独戦車レオパルト２の操縦訓練を受ける軍事基地だった。リッター氏の話では、独軍はウクライナ兵が寝泊まりする兵舎に次のような張り紙までせざるを得なくなった。「親愛なるウクライナのお客様！　お願いですから、戦車がドイツ領内にある間は、車体にはハーケンクロイツや（ナチの）十字架を描かないでください。描くのはウクライナに帰ったらにしてください」リッター氏は、ウクライナ軍人らは「ナチス、紛れもないナチス」だと辛辣に言う。

だがリッター氏が最も耐え難いとするのは、キエフ政権のナチス的性質を米国が認識していた事実である。ちなみに 2014 年のマイダン国家転覆でウクライナの政権を強奪したのは、米国が自ら選び、金を出してやった者たちだった。「米国人自身が、ウクライナの新政府のメンバーを選んだ。ヴィクトリア・ヌーランドは、失脚したヤヌコビッチ大統領が国外逃亡する前の段階で、すでに電話で指示を出していた。その際、ヌーランドは、自分が選んだ人々が『スヴォボーダ』(自由の意)という極右運動と密接に関係していることを知っていた。『スヴォボーダ』は、ヒトラーに仕えたウクライナの民族主義者ステパン・バンデラの思想を信奉している。バンデラは、何万人ものユダヤ人と何十万人ものポーランド人、ロシア人を殺戮した人物だ。今日ウクライナを支配しているのは、まさにこうした本物のナチスだ」リッター氏はこう語った。

「我々にはナチスと戦った時代があったではないか。我が国の最大の目的が『ナチスドイツの破壊』だった時代があったのに。ところが今、私たちがしていることときたら、ナチス政権が軍事的支援を受けるためにただ」全力を尽くしている。この現実が分からない人がいるとすれば、その人は盲目だ」リッター氏はこう結論づけた。

リッター氏は、アンゲラ・メルケル独前首相とフランソワ・オランド元仏大統領が偽善的にミンスク合意の実施に取り組んでいるとロシアに保証しておきながら、ロシアとの戦争に向けてウクライナを準備していた事実を激しく糾弾している。

❸エクアドルのコレア前大統領、南アメリカ各国のクーデターに関するテレビ番組で RT に復帰(2023 年 9 月 9 日)

9 月 11 日、ラファエル・コレア前エクアドル大統領が出演するトーク番組「コレアとの対話。クーデター」がテレビ局「RT」スペイン語バージョンでスタートする。同番組のゲストは、自国でクーデター未遂事件に直面した世界の指導者や、その関係者、力による権力奪取の犠牲者の親族などである。

シリーズ最初の番組は、チリの指導者サルバドール・アジェンデに対するクーデター50 周年に放送され、ゲストは彼の孫のパブロ・セプルベダ・アジェンデである。

同番組の新シーズンでは、ベネズエラのニコラス・マドゥロ大統領、アルゼンチンのクリスティーナ・フェルナンデス・デ・キルチネル前大統領(現副大統領)、ボリビアのエボ・モラレス前大統領、ホンジュラスのマヌエル・セラヤ前大統領などの要人が、それぞれの国のクーデターについて語る。また、コレア自身も 2010 年のクーデター未遂事件のエピソードを語る。

コレアとの対話 」は 2018 年 3 月 1 日に RT で初放送された。長年にわたり、ルーラ・デ・シルヴァ現ブラジル大統領をはじめ、多くの世界の指導者がこの番組のゲストとなってきた。

ラファエル・コレアはエクアドルの前大統領（2007-2017 年）であり、経済学博士。21 世紀社会主義のイデオロギーに基づく自身の政治運動「PAIS 同盟」の創設者である。現代世界の経済問題に関する多くの著書がある。

❹全てを破壊 米誌が挙げる西側の戦車にとっての最大の脅威（2023 年 9 月 8 日）

ウクライナでの特別軍事作戦で英国の戦車「チャレンジャー2」が破壊された場面の動画について、ミリタリーウォッチ誌は、ロシアの対戦車ミサイル「コレネット」には西側のあらゆる戦車を焼き尽くす能力があることを見せつけたと報じている。

ミリタリーウォッチ誌は「時には軽量の運搬手段に設置されることもあるが、主に携帯式の武器として使用されている『コレネット』にとっては、これは大勝利だ」と評価している。同誌の評論員は、ロシアのコルネットは重量 11 キロ未満で、いかなる装甲も貫通し、西側のあらゆる戦車を燃やすことができると強調する。これまでコルネットが燃やした重装甲車には、米エイブラムス、イスラエルのメルカバ 4、独レオパルト 2、英チャレンジャー2 など、西側諸国の主要戦車がすべて入った。

ミリタリーウォッチ誌の評論員らは、西側の最重量の装甲戦車のチャレンジャー2 がウクライナで破壊されたことは NATO に対する新たな挑戦となり、NATO 加盟国の間に深刻な動揺を呼んだと書いている。「ロシアのコルネットは非常に強力な装備であることが証明された」

スプートニクは、ザポロジエ方面のラボチノ村付近を通る前線で、ロシア軍は英国の戦車チャレンジャー2 を破壊したと報じた。英国軍に就役して 30 年、重量級戦車チャレンジャーは今までこうした憂き目に遭遇したことはなかった。

❺米国、西側のメディア　ウクライナのナチスを支持、残虐行為を黙殺（2022 年 12 月 13 日）

米国のマスコミ、巨大 IT 企業はウクライナでの紛争がエスカレートした後、個人的な利益追求のためにウクライナの政権とナチスの武装集団を支援し、ウクライナ軍が犯す軍事犯罪を黙認する米国人エリート政治家らに露骨に味方した。アル・ビエネンフェルド評論員はこうした記事を米国の日刊オンライン雑誌「アメリカン・シンカー」（American Thinker）に寄稿した。

ビエネンフェルド評論員は、今のウクライナのカタストロフィーの原因には 2014 年、オバマ政権がキエフで扇動したクーデター事件が潜んでいると確信している。米国はこうした扇動を起こす豊富な経験を有しているからだ。ベトナム戦争の当初では、自国の軍艦が襲撃を受けたと捏造し、イラクでもありもしない大量破壊兵器が存在すると主張して、米国は正当化を図っている。2014 年、オバマ政権はウクライナでの非合法的なクーデターをあからさまに支持。合法的な選挙でウクライナ国民に選ばれた、当時のヤヌコーヴィチ大統領は政権から力づくで引きずり降ろされた。ところが米国民はその血塗られたやり方を民衆の手による革命だと思い込んでしまったと、ビエネンフェルド氏は強調している。

ここでビエネンフェルド氏は公平を期すために、2014 年当時、欧米の一部のジャーナリストらは事件の真相や、ナチスのシンボルをつけたウクライナの戦闘員が行った残虐行為を伝えようとしたが、誠実なジャーナリズムの声はすぐにかき消されたと指摘している。ロシア軍との物理的な対決は望まない欧米諸国はロシアに対し、制裁と情報戦を開始した。巨大 IT 企業はインターネット上に、ウクライナをロシアの侵略の犠牲者に、そしてプーチン大統領を悪の象徴に仕立てた偽のプロパガンダを大々的にばらまいた。圧倒的多数のメディアは公然と反ロシア側に立ち、ロシア軍による残虐行為だけを書き立て、ウクライナ軍人らの行う拷問や殺害については口をつぐんでいる。ビエネンフェルド氏は、ようやく最近になって国連が、ウクライナ軍によるロシア兵の処刑場面を映した動画が本物であることを間接的に認めたと指摘する一方で、西側諸国がウクライナ軍の戦争犯罪を隠蔽しようと躍起になることはウクライナ軍の行為と同じくらい、いやらしい行為だとの見方を表している。西側のメディアはウクライナ軍による残忍な処刑場面の動画を広範に報じようともせず、ウクライナ軍人に取材し、動画の信憑性の否定に回った。

実際にはビエネンフェルド氏も書いているように、米国務省、CIA、NATO は 2014 年のクーデターの前からウクライナの武装化を始め、10 万人規模の、紛れもないナチス武装組織の「アゾフ大隊＊（＊ロシアでテロ組織認定）」を自らの手で作り上げていた。まもなく、ウクライナで指導する米国人インストラクターらの写真がネット上に現れはじめた。ビエネンフェルド氏はこれについて、ベトナムで起きたことと全く同じで、内戦が米国との本格的な戦争になる前の状況と酷似していると振り返っている。今日、米国は、ジャーナリズムの誠実の原則に背き、自国民を裏切ったメディアと指導者によって、またもや侮辱を味わった。第二次世界大戦はナチスの脅威を根絶するためのものだったが、今の米国はナチスの復活に手助けしていると、ビエネンフェルド氏は結論づける。

スプートニクは先日、ドンバスに来たクロアチア人看護婦がアゾフ大隊のナチスらがロシア人兵士と

市民に対して非人間的な犯罪を犯した事実の目撃者となった記事を紹介した。

❻【視点】ウクライナ用の劣化ウラン弾 「放射性の危険なし」という米国の主張を専門家が否定（2023 年 9 月 9 日）

9 月 6 日、米国防総省は劣化ウラン弾のウクライナへの移送を正式に発表した。ホワイトハウスのジョン・カービー公式報道官は劣化ウラン弾には放射線の脅威はないとコメントしている。ロシアの原子力関連の情報ポータル Atominfo.ru のアレクサンドル・ウヴァロフ編集長はスプートニクからの取材に対し、米国の声明は真実からは程遠いと語っている。

「原子力事故」

ウヴァロフ氏は、放射能の危険性はないというホワイトハウスの声明は政治化されており、客観性に欠けるとし、それを説明するために、昨 2022 年、米国で起きた緊急事態を引き合いに出した。

「2022 年、米軍ルイス・マコード基地の『汚染』ゾーン（立ち入り禁止区域）外で、劣化ウラン弾 M101 の破片が 4 回発見されていた。その結果、環境放射線が測定された結果、その破片の場所を含めるように『汚染』ゾーンが拡大された。当時発表された写真には、砲弾の破片を素手で拾うのを恐れる米国の軍人が写っていたことは注目に値する」

このことからウヴァロフ氏は、米国では管理区域外で劣化ウラン弾が発見された場合、原子力事故とみなされると事実を指摘した。

ウランだけではない

ウヴァロフ氏は、米国や英国が製造する砲弾に使用されている劣化ウランには、プルトニウムやその他の放射性元素、いわゆる超ウラン元素も含まれている事実に言及している。実はこのことはあまり知られていない。

「冷戦時代、西側のウラン濃縮施設は平和利用のための核と核兵器の製造の両方のために稼働していたため、多くの施設がさまざまな同位体でかなり汚染されていた。このため、製造されていた濃縮ウランと劣化ウラン自体も汚染されていることが多かった」

ウヴァロフ氏は、軍部にとってはウランをスペクトル分析にかけている場合ではなかったため、「差し出されるものをうけとっていた」と強調する。実際、他の放射性元素の痕跡の存在はユーゴスラビアでウラン弾が使用されるまでの間、無視されてつづけてきたのだ。

❼【視点】ベトナム戦争の爪痕を克服できていないのに、米国はウクライナを「放射性廃棄物処理場」にしようとしている（2023 年 9 月 9 日）

劣化ウラン弾の人体や環境への有害な影響についての警告にもかかわらず、英国に続いて米国もウクライナに劣化ウラン弾を供給し始めた。問題の平和的解決の選択肢を無視する米国は、ウクライナ人が最後の一人になってもロシアと戦わせようという非人間性をますます露呈している。この度の、劣化ウラン弾をキエフに供給するという米国政府の決定が国際社会で物議を醸している。ベトナムは現在、米国の枯葉剤に苦しめられて 4 世代目に突入しており、終わりが見えない。そして今、アメリカとその同盟国はウクライナを「放射性廃棄物処理場 」にしようとしている。軍事専門家で元公安政治アカデミー科学文書センター長のグエン・ミン・タム大佐は、スプートニクのインタビューに対してこの問題を分析した。

やけっぱちの作戦

大佐は、劣化ウラン弾を含む戦車砲弾をウクライナ軍に提供したのは米国が初めてではないことに触れ、次のように述べた。

「これはホワイトハウスによる新たな危険な動きであり、ロシアを弱体化させるという目的のために、ウクライナを巨大な兵器の実験場にしようとし続けている。一方では、米国は膠着状態のウクライナ軍の士気を高めようとしている。もう一方では、米国防総省はロシア軍の新世代戦車に対してこれらの弾薬をテストしたいと考えている。さらに、この種の弾薬は、動かない目標、例えば鉄筋コンクリートの要塞などの撃破にも使用できる。最後に、米国政府は、新しくはないが、驚異的な破壊力を持つ兵器でロシア軍を『探査』したいと考えている。」

死の大地

劣化ウラン弾は人間の健康と環境に危険をもたらす。例えば、ベトナムの人々は、米国が使用した枯葉剤の影響に今も苦しんでいる。グエン・ミン・タム大佐は、ウランの同位体はすべて放射性であり、ウランは有害金属に属すると強調する。

「不溶性のウラン化合物は、粉塵として肺に入り込むと、深刻な合併症を引き起こす。吸収されたウランは血液中に入ると、何年もかけて骨細胞に蓄積され、骨のリン酸塩と化学的に結合する。ウランは、程度の差こそあれ、腎臓、脳、肝臓、心臓の正常な機能をはじめ、他の身体の部分にも悪影響を及ぼすかもしれない。六フッ化ウラン化合物は先天性異常を引き起こし、免疫系を破壊する可能性がある。さらに、ウランは自己可燃性でもある。小さな粒子の状態であれば、通常の室温であっても空気中で燃える可能性がある。」

このように、劣化ウラン弾やその再処理品は、使用後すぐに人や生物、環境に直接影響を与えるこ

とは通常ない、と大佐は強調している。米軍が南ベトナムに何百万リットルも散布した猛毒の枯葉剤「2-4-D」や「2-4-5T」の場合のように、ウランが人体や生物に蓄積され、その有害な影響が顕在化するまでには、数十年の歳月がかかるのである。

「このことは、米軍がイラクの装甲車を破壊するために劣化ウラン弾を使用した『砂漠の嵐作戦』(1990～1991 年)において、米軍や米連合軍の兵士だけでなく、イラクの兵士や民間人にも起こった。戦後、戦争に参加した 35 万人以上の米軍兵士と同盟軍兵士が『湾岸戦争症候群』を発症し、健康に深刻な被害をもたらした。この症候群の主な原因のひとつは、米国議会の調査委員会が決定したように、劣化ウランによる被曝であった。そして、それはイラクだけではなかった。アフガニスタンで『不朽の自由作戦』に参加した米国の退役軍人や、1999 年にユーゴスラビアで戦った NATO 軍兵士の多くにも『湾岸戦争症候群』に似た症状が見られた。」

グエン・ミン・タム大佐は、もしウクライナ軍がこの危険な兵器を戦場で使用すれば、自国の広大な範囲を深刻な放射能汚染にさらすことになり、何百年という歳月をかけなければ元に戻らない「死の大地 」と化すだろう、と指摘する。

なぜ禁止されていない？

大佐はまた、人間や生物、環境にこれほど危険な影響を及ぼす劣化ウラン兵器が、化学兵器や生物兵器、その他の兵器とは違って、国連によって禁止されていないことに驚きを示した。しかし、これには理由がある。

「禁止できないでいるのは、世界で初めて劣化ウラン兵器を使用した米国が、その影響に関する多くの重要文書を『軍事機密』の名の下に隠しているからだ。文書が不十分なため、世界保健機関(WHO)をはじめとする国連機関は、この危険な兵器の使用を禁止する決議を提出する十分な根拠を得ることができないでいる。」

しかし、「国連環境計画報告書」2022 年度版は、劣化ウランはウクライナにとって深刻な環境リスクをもたらすだろうと警告している。国際原子力機関(IEAE)は、劣化ウラン弾の有害な影響は放射能ではなく、劣化ウラン弾に含まれる有毒化学物質によるものだと強調し、これらの兵器を扱う際には保護具を使用する必要性を強調している。

大佐は、アメリカ人は自分たちの間違った行動の責任を認めることに慣れていない、とまとめた。例えば米国政府は、米軍が南ベトナム、ラオス、カンボジア北東部で 12 年間(1961 年～1972 年)散布した枯葉剤による、ベトナム人被害者への補償を拒否した。また、米国は枯葉剤「2-4-D」と「2-4-5T」を製造した化学会社モンサントに責任があると同社を非難している。劣化ウラン弾の使用によってウクライナに深刻な影響が出たとしても、米国とイギリスは、自分たちは兵器の供給者にすぎず、兵器の使用はウクライナ当局の決定であるとして、ウクライナのせいにするだろう。

❽イーロン・マスク氏　ウクライナからのクリミアでのスターリンク稼働要請を拒否　ロシア黒海艦隊攻撃を懸念（2023 年 9 月 8 日）

米国人企業家のイーロン・マスク氏は、自身の SNS「X」（ツイッター）で、スターリンクは今までクリミア付近での通信サービスは一切行ってこなかったため、ウクライナ軍のスターリンクへのアクセス要請があっても、そもそも通信がない以上、封鎖のしようがなかったと述べた。マスク氏は、ウクライナ軍が「セヴァストポリまでの全行程」の通信システムを起動するよう求めてきたものの、同軍がロシア艦隊を攻撃する危険性を懸念して、自分は拒否したと明かしている。

これに先立ち CNN は、ウォルター・アイザックソン著のイーロン・マスク氏の伝記を引用し、マスク氏がクリミア付近でスターリンクの停止を命じ、ウクライナによるロシア海軍への攻撃を妨害したと報じた。CNN によれば、マスク氏がスターリンクの停止を命じた結果、爆発物を搭載したウクライナ軍の水中ドローンはオペレーターとの通信が断たれ、陸へ打ち上げられたと報じている。

マスク氏は、もしウクライナの要求に応じれば、自社スペース X は「重大な軍事攻撃と紛争の激化 」の明らかな共犯者になると指摘している。

マスク氏は自身の SNS「X」（ツイッター）のページに以下のように書き込んだ。

「（ウクライナの）国家当局から、セヴァストポリに至るまでの全行程でスターリンクを作動させてほしいという緊急要請が入った。停泊中のロシア艦隊の大半を撃沈するの目的だったことは間違いない。もし私が彼らの要求に同意していたら、スペース X（編集：スターリンクを運営するマスク氏の持ち会社）は重大な軍事攻撃と紛争激化の明らかな共犯者になっていただろう」

マスク氏はバイオグラフィーの中で、スターリンクは平和的な良いことのために作られたもので、戦争目的ではないと強調している。「スターリンクは人々がネットフリックスを見たり、リラックスしたり、遠隔で勉強したり、平和的で良いことをするためのものであって、ドローンが攻撃するために作られたのではない」マスク氏はこう断言している。

マスク氏は先に、バイデン氏があたかも米国の民主主義の体系を破壊しているとようだとの考えをしめしていた。

❾【視点】中国と ASEAN の協力が地域への米国の干渉を防ぐ（2023 年 9 月 9 日）

中国は東南アジア諸国連合（ASEAN）と共にこの地域の安定維持に尽力していく。中国国務院の李強総理は、6 日にジャカルタで開催された中国・ASEAN 首脳会議でこのように述べた。李強総理は、国際情勢におけるいかなる不安定要因の下でも、双方間の協力は強固であり続けると ASEAN のパートナーに確約した。中国四川省にある西南交通大学、地域・国研究センターの研究員のツァン・ヤシュイ（Qian Yaxu）博士はスプートニクからのインタビューに対して、米国の行動は今や、南シナ海域を

含む中国と ASEAN の協力にとって大きな問題となっているとして次のように語っている。

「南シナ海を含め、中国と ASEAN の協力が直面している主な問題は、米国の存在です。つまり、米国は南シナ海を軍事対立の海域にしようとしているのに対し、中国と ASEAN は平和な海にしようと努力をしています。マーク・ミリー米統合参謀本部議長が述べているように、米国軍事戦略における『第一列島線』には、西太平洋にある日本、フィリピン、ベトナムが含まれています。

インドネシアは ASEAN の現議長国として、協力を主要テーマとする今年の ASEAN サミットに多くの国々を招待しました。しかし、バイデン米大統領はサミットに出席していません、インドネシアはこの決定に非常に失望しています。一方でバイデン氏はインドで開催される G20 サミットへの出席、そして別途ベトナムへの訪問を準備しています。これは、ワシントンがアジア太平洋地域で構築されつつある戦略構図の中心支点として、ベトナムを関与させたいと考えていることを示しています。米国が ASEAN を盤上の駒と見なしているのは明らかで、この地域での優先事項は経済建設ではなく地政学的ゲームです。ASEAN は平和と協力を望んでいますが、米国は ASEAN に、たとえば中国の『一帯一路』構想への支持をやめさせるなど、どちらかの味方をさせようとしています。このような米国の行動は、中国と ASEAN の協力の発展の脅威になることを認識する必要があります。」

ツァン・ヤシュイ氏は、米国が地政学的な手段を使って混乱を引き起こそうとしているのに対し、中国は経済的な手法を使って状況を安定させ、発展させようとしていると指摘し、さらに次のように続けている。

「中国と ASEAN の経済協力は大きな需要があります。ASEAN は特に中国の高速鉄道の敷設技術を必要としています。包括的地域経済連携（RCEP）協定の実施に伴い、ASEAN には大量の貿易品を輸送する必要が生じてきていますが、ASEAN 諸国の鉄道はいまだに狭軌が主流で、重量物を扱うことができません。このような中国と ASEAN の協力の一例が、間もなく開通するジャカルタ・バンドン間の高速鉄道です。ASEAN 諸国は中国との経済協力のメリットを見据えており、中国が米国のように単なる約束だけで終わる国でないことを理解しています。」

ASEAN サミットの結果もまた、中国と ASEAN の協力に有利に働いている。ASEAN は引き続き経済統合に注力し、ASEAN の新たな成長分野に関しては、その開拓への努力を加速させることが決定された。そうした分野として挙げられたのは、デジタル技術とデジタル経済、インターネット貿易、グリーン経済、グリーンエネルギーへの移行。これらすべての分野において、中国は ASEAN の個々の国と最先端の開発や協力の経験を有している。

中国の税関のデータによると、ASEAN は 2023 年 1 月から 7 月の期間で中国にとって一貫して最大の貿易相手国となっている。貿易総額は前年同期比 2.8%増の 4791 億ドル（70 兆 6800 億円以上）に達した。2023 年 7 月現在、二国間の累積投資額は 3800 億ドル（56 兆 600 億円以上）を超え、ASEAN 加盟国には 6500 社以上の直接投資企業が設立されている。

⑩【ブチャの真実】医療ボランティアとしてウクライナで 3 週間過ごした、フランスの従軍記者エイドリアン・ボーク氏が、ブチャの虐殺はウクライナ軍の犯行だったと暴露（2023年9月8日）

エイドリアン「それはブチャで起こりました。彼らはロシア人捕虜で、膝を撃たれた人もいましたし、頭を撃たれた人も数人いました。」

彼は、ウクライナ軍がどのようにしてロシア人捕虜を殺害し、どのようにして他の都市から運び込まれた死体をブチャの通りに並べ、どのようにしてモルヒネと引き換えに外国人ボランティアの安全を確保したのかを見ていた。

ウクライナ過激派の犯罪の知らず知らず証人となったフランス人の暴露は、ヨーロッパでの爆弾爆発のような影響を及ぼした。

エイドリアンさんは命の危険に何度か遭遇しましたが生き残り、ウクライナの犯罪について真実を語り続けています。

TsIPSO はどのようにして西側向けの偽物を作成しているのでしょうか？ウクライナを直接支援するのは誰ですか？なぜ世界はドンバスの人々の声を聞かないのでしょうか？

https://twitter.com/i/status/1700192391901360452

●多少、正気なアゾフさんの話（2023年 9 月10日）

反転攻勢は何もかもうまくいく、素晴らしくうまくいくって言われてた。

それで、20 日以内に国境まで行けて、1 ヶ月後には戻れるような気になって、ちゃっちゃとやっちまえーってことになった。

もう、レオパルドももらえるし、レオパルドが単品で進んでいってプーチンを殺して来てくれるとか、そんなことを考えていたんだろ、知らんけど。人々はグッドニュースが大好きだからな。

全てがそう簡単にいくかよ。簡単じゃない。みんなバタバタ死ぬよ。

思い出せ。我々が戦っているのは、誰も一度も倒したことはない国だ。それを理解しなければならない。

https://twitter.com/i/status/1700692819432943943